



# 町民文芸

## 只見短歌会

九月詠草

大塚栄一

指導

齊藤ちひろ

口ずさむ青春の歌途切れつつ八十路の寂しさしみじみ思ふ

吉津 政枝

年重ね遠く住む子の招き受け上京の有無を幾夜も思案す

渡部ゆき子

門付けの神楽呼び入れ魔除け乞へば鍾馗の面に孫は怯ゆる

五十嵐英子

花持ちて施設訪ひくるる姪らゐて子のなきわれも寂しくあらず

古川 英子

共稼ぎの裏の家今宵も点らねば太鼓叩きて子供らは待つ

目黒 富子

急激に多き雨量の降りつぎて庭のめぐりの土削られつ

皆川 恒子

食卓の家族ら見つつ病院に一人飯食む兄をかなしむ

五十嵐夏美

町小さく口伝へにて情報の良きも悪しきも忽ち届く

馬場 八智

夕暮れて静かに雨の降り出せば蒔きし大根を思ひ安らぐ

渡部ヨリ子

一面に黄色く稔る稲の穂に不安もちつつ夫は刈りゆく

鈴木 邦芳

師の歌碑は秋風のなかわが生を思ひこの朝黙し歩まむ

新国 洋子

慎ましく生き来しわれか惜しげなく娘の捨てし食器を拾ふ

## 只見俳句会

十月例会

目黒十一

指導

礼

邦夫

身に入むや湖底の小山現わるる

颱風の行方氣になる蕎麦畑

秋天や石を投げれば川に音

喪歸りの一人の道や星月夜

修 一

康 女

亡き父の鎌を片手に拾う粟

古葉書の人の疎遠に虫すだく

神主の衣さやさやと村祭

朝風やふうせんかずら寄れば揺れ

一 灯

リウコ

首細き花瓶選べり菊の花

新涼や抹茶の香り立つ山家

メロン切るやメロンに刃物吸い付きて

釣舟草刈るには惜しき紅の冴え

邦 男

一 穂

秋桜括られていて丈高し

一ト仕事明日へ残さず秋の暮

三晩つづけて邯鄲を聞く厨かな

早稲にまだ青実の残る刈り始め

吉 児

死線突破の退院を祝ぐ栗強飯

遷宮やご先祖よりの露払い

隆 堂

仔カモシカ顔膨らます野分かな

宵闇や篝火点す川の駅